

2025年度 小・中学生

# 「いのち」の作文コンクール



© Moe Nagata

JR西日本あんしん社会財団 2025年度小・中学生「いのち」の作文コンクール 作品集

公益財団法人 JR-West Relief Foundation  
JR西日本あんしん社会財団

作品集

— さくひんしゅう —

公益財団法人 JR-West Relief Foundation  
JR西日本あんしん社会財団

# ごあいさつ

公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団

理事長 来島達夫

当財団は、2005年にJR西日本が惹き起こした福知山線列車事故の反省から設立され、「いのち」や「こころ」、「安全」をテーマに様々な活動を行っております。

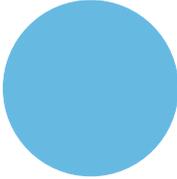
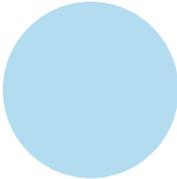
本コンクールは、作文を通じて将来を担う小・中学生の皆さんに「いのち」の大切さを考えていただくとともに、それにより「いのち」を大切にできる安全で安心できる社会づくりにつなげていきたい、という思いを込めて、近畿2府4県で募集しており、7回目を迎えた今回は3千8百余の応募をいただきました。

今回は、大切な人やペット、日々の何気ない会話を通じて感じた「いのち」に関する作品が多いことに加え、戦後80年となることから、戦争や紛争を通じて、いのちについて考える作品も増えました。

小・中学生の皆さんが感じる様々な「いのち」に、皆さん一人ひとりが真剣に向き合い、考えているからこそ、今回もまた、心に訴える数多くの作品に出会うことができました。皆さんのいのちの尊さや生きることへの思いが込められており、主催者として大変嬉しく思います。

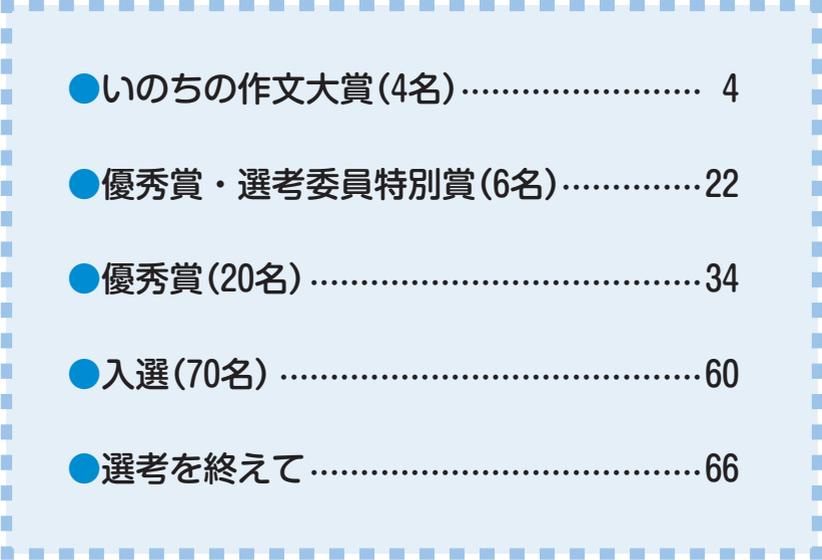
コンクールの実施にあたり、ご指導いただきました学校関係者の皆様、並びにご家族の皆様ほか、多くの方々からのご協力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

本作品集への掲載は、ご応募いただいた作品の一部ですが、小・中学生の皆さんはもちろん、広く多くの方々に「いのち」について考えるきっかけにいただければ幸いです。



C O N T E N T S

目 次

- 
- いのちの作文大賞(4名)..... 4
  - 優秀賞・選考委員特別賞(6名).....22
  - 優秀賞(20名).....34
  - 入選(70名).....60
  - 選考を終えて.....66

# いのちの作文大賞

(小学生 一・二年生)

## メジロの赤ちゃん

神戸市立春日台小学校 二年一組 太田 咲南

わたしの家の木から、ピーピー声が聞こえた。よく見てみると、鳥がすをつくっていた。しらべてみたら、メジロのすだった。しばらく見ていたら、きみどり色のかわいい鳥が何かをくわえてすにもどってきた。ピーピーピー。メジロの赤ちゃんが口を大きくあけて、じゅんばんにえさをもらっていた。まだ毛が生えていなくて赤かった。赤ちゃんって本とくに赤いんだ。この日から、わたしは家の木に生まれたメジロの赤ちゃんが気になるようになった。朝ごはんを食べる前に行き、学校から帰ったら見に行き、ねる前に行き、かわいくて何回見てもあきない。ある日、雨がふった。けいぼうが出そうなくらいのすこい雨だった。雨がふっていたけど、メジロの赤ちゃんが心ばいで見に行った。雨にぬれてしんでいないかな。そんなふうに思っていたけど、すを見てびっくりした。メジロのお母さんが、自分がかさになって、すにふたをしていた。赤ちゃんを自分の体で雨からまもっていた。メジロのお母さんってすごいと思った。

だんだん赤ちゃんにきみどり色の毛が生えてきた。ある日、赤ちゃんが一羽、すからおちていた。たすけてあげたい。でも、お母さんに、さわったらだめだよ、人間のおいがついたらお母さんにおせわしてもらえなくなってしまうじゃうよ、と言われた。とつぜん、赤ちゃんがフラフラっとんだ。ちかくでメジロのお母さんがとび方を見せていた。ちゃんとそれをまねしてとんだ。まだまだへたくそだけど、とんだ。すからおちたんじゃない、もう赤ちゃんじゃなくなつたんだ。

生まれていのちは、お母さんやお父さんにまもられて、そだっていくんだ。いつか自分で生きていけるように。わたしはメジロに大じなことを教えてもらった。

## 講評

家の木にメジロが巣を作った、すごい雨の日に母メジロが傘となって巣を守った、メジロの赤ちゃんが巣から落ちたと思ったら飛べるように育てていたという3つのエピソードが、目に浮かぶような鮮やかな描写で原稿用紙2枚に収められている。末尾も、「わたしはメジロに大じなことを教えてもらった。」で締められ見事である。全編を通じて、作者の驚きや、いのちを考えるとこのことをうまく表現できている。



# いのちの作文大賞

(小学生 三・四年生)

生きているってすごい！

姫路市立旭陽小学校 四年一組 鵜飼 一有

アゲハチョウの羽化するしゅん間が見たくて、サンショウの葉っぱで見つけた幼虫をケースに入れて育てる事にした。3ミリ程の幼虫は葉っぱをムシヤムシヤと食べ、日に日に大きくなっていく。きれいな緑色で頭にはおしゃれなまよう。そっと触ると黄色いつのを出して怒る。とてもかわいい。丸々太った幼虫はやがて動かなくなり、糸で体を固定してさなぎになった。いよいよ羽化するのかなと思うとワクワクした。

「もうすぐ羽化するよ。」

さなぎになって十日目の朝。お母さんに起こされて急いでケースを見に行くと、さなぎがピクッピクッと動いている。さなぎのからが割れてゆっくりとアゲハチョウが出てきた。幼虫とは似ても似つかないその姿を僕は不思議な気持ちで見ていた。さなぎから出てきたチョウの羽はシワシワで、時間をかけてゆっくりのばしていく。ストローのような口を曲げのばしする。うまく羽化できているか確認する様子を僕も見守っていたけれど、「まずい。」チョウの下の羽がシワシワのまま、いつまでたっても広がらない。パタパタとぶ練習を始めたがポトンと枝から落ちてしまう。ケースの底で何度も何度も羽を動かすけれど体が持ち上がらない。それでもとぼうとするうちに、シワシワの羽はちぎれてそのうち動かなくなった。あれほど見たかった羽化のしゅん間だったのに。元気にとび立つと思っていたのに。予想しない結果に僕はどうすれば良いかわからず、命の消えたケースの中をしばらく見ていた。

毎年夏休み、この作文を書くために僕は命について考える。テレビをつければ今日も世界

のどこかでミサイルが落とされ、たくさんの人が死んだとニュースが伝えている。大変な事が起きているとはわかっててもその恐ろしさや悲しさが心に広がる前に、「続いてはスポーツです。」の明るい声と音楽で画面が切り替わると、「今日のカープは勝ったかな。」と、僕の頭も切り替わる。命はどこか遠いものだった。だけど小さなケースの中で見つめた命は僕にとっては忘れられない命となった。

庭をヒラヒラとぶチョウを見ると、あのアゲハチョウを思い出す。生きているってそれだけです。すごい事なんだって思い出す。

## 講評

楽しみにしていたアゲハチョウが羽化する瞬間を目撃したが、羽化に失敗し、死んでしまった。命が消えた瞬間を呆然と見ていたが、普段どこか遠いものだった命が身近に感じられ、生きているだけです。すごいと思いついて返す出来事となった。作者は3年連続で入賞しているが、毎年、作文を書くために命について考えて、成長して見えてくるものが変わってきている。よく観察できている、描写や文章がうまい。場面変化も巧みである。



## 命って思っていたよりずっと重い

私立京都女子大学附属小学校 五年三組 中井 穂佳

「命を大切にしましょう」

その言葉は、私のこれまでの人生では何度も親や先生から聞いてきました。でも、どこかあたり前すぎて、心には深く入ってきませんでした。だって、家族と笑って、ご飯を食べて、学校へ行く。そんな毎日は、日常でずっと続くのが普通だと思っていたからです。

でも、その気持ちが少しずつ変化したのは今年の六月に、平和学習のために広島原爆資料館を訪れたからです。

資料館に入った途端、空気がひんやりとして、私の足が少し止まりました。周りの声が消えていくような静けさ。空気が変わった気がしました。焼けた壁の影、ガラスの中に並べられたこげたお弁当箱、止まったままの時計、やぶれた着物、黒くにじんだガラスビン。そこにあったのは、「物」ではなく、「命のあしあと」でした。

私が一番心を打たれたのは、一つのランドセルでした。七才の女の子が使っていたもので、色もわからないほどこげていて、ベルトもふたも溶けていました。説明文には、その子がどこで原爆にあって、どのように命を落としたのか書かれています。私は胸が苦しくなりました。「私とそんなに年もちがわないのに…。」と思ったけれど涙は出ませんでした。ただ、心の中で何かが、静かに、動き出した気がしたのです。

その夜、家に帰ると、いつもと変わらず弟と妹が笑いながらテレビを見ていました。その姿を見た時、胸の中にくっつきあたたかい気持ちがありました。

「生きていてくれて、ありがとう」

こんな気持ちになったのは初めてでした。いつもはにぎやかすぎて、すぐにケンカをするけれど、その声もいとおしく思えます。

その日から、私の中で小さな変化が始まりました。「いただきます」や「ごちそうさま」を心をこめて言うようになりました。「ごめんなさい」「ありがとう」と素直に言えるようになりました。弟がイタズラをしても、怒る前に話を聞くようになりました。何かイライラしていても、深呼吸して考えられるようになりました。

だれかの命と自分の命は、どこかでつながっている。命って、だれかの中で生き続けているのだと感じます。

原爆資料館で見たこと、聞いたこと、感じたこと。すべてを言葉で表現できる自信はありません。でも、あの日私の中に生まれた思いは、これからの私の生き方を、きっと少しずつ変えてくれると思います。

命って、思っていたよりもずっと重い。その重さは、見えないけれど、たしかに私の中にあります。だから私は、これからもその命を大切に大切につないでいきたいと思います。

## 講評

「命を大切に」の言葉が当たり前すぎて入ってこなかったが、原爆資料館に行き、当たり前でないことを知る。見学した事実だけが書かれているのではなく、足が少し止まって、自分の中の小さな変化の始まりも書かれている。でも「こうだ」とは書いていない。その後は、普段から命のことを考えるようになったということである。弟と妹がテレビを見ているといういつもの景色を見て、「生きていてくれて、ありがとう」という温かい気持ちが湧いてきたところが、とても子供らしくて素直さが感じられる。

## 思い出は今もこの胸に

京都市立加茂川中学校 三年六組 杉 いおり

「おばあちゃん、おっきいのとれたよ！洗ってないけどもう食べてもいい？」

暑い夏の入道雲を背に広い畑で泥だらけになりながら、曾祖母と夏野菜をとった思い出を今でも鮮明に覚えている。畑までの道沿いにある赤い実を一緒にとって口に入れ、細いあぜ道を大きなバケツを持ってスキップしながら、曾祖母の内緒のミョウガがなる秘密基地を覚えてもらうと「みんなには内緒だよ。」とシワシワの曾祖母の顔がニコツと笑う。私はそんな時間が好きだった。

曾祖母の野菜は無農薬で少し形が面白い。大きくて長いキュウリがあったり、ひょうたんみたいな形のカボチャが転がっていたり、プリプリのお尻みたいな真っ赤なトマトもある。「いおりちゃん、スペシャルがあるよー、探してごらん！」と作業をしながら曾祖母が叫ぶ。宝探しでもするかのようには、畑の中を姉と一緒に夢中で歩いてみると「あー見つけた！」端っこの方にドカッと転がる私の頭と同じくらいの大きさのスイカ。大喜びで持ち上げた。その大きなスイカを姉と交代で持ち帰り、家に着いてまずはみんなにお披露目する。そして早速スイカ割りに挑む。目隠しをして手の鳴る方へと棒を振り上げるが、みんな大失敗。食いしん坊だからか、私の一撃はしっかり当たり、スイカが見事にパカッと割れた。そのまま人数分に切り分けて縁側で外の池の鯉を見ながらみんなで食べた。甘くてみずみずしくて、喉も渴いていたから夢中で頬張った。「おばあちゃん、このスイカの種を飛ばしたらここにスイカなる？」と聞いたら、「どうじゃろう？それより、もうこんなにポンポコのお腹しちよ

# いのちの作文大賞 (中学生)

るわ！」私のお腹をくすぐりながら曾祖母が笑った。

春には曾祖母の畑の一部は子どもたちが遊べるようにとレンゲ畑に変わる。姉の幼稚園の友達も呼んで、みんなでダイブした！私は花や昆虫も大好きなのでかわいい花を潰すのは心が痛んだが、ふかふかして面白かった。シロツメクサで王冠も作った。横の畑にはたくさんキャベツができていて、私は小さな青虫を見つけた。手に乗せてみたらかわいくて喜んでいたら、「青虫は野菜に悪さをするからいけんのよ。潰しなさい。」と曾祖母が言った。思わず「小さな虫にも命があるのよ！」と私が叫んだら曾祖母はびっくりした様子だったが、私はそっとキャベツに青虫を逃がした。このことがあってから、曾祖母の野菜が我が家に届く時には、キャベツにいつも青虫がついていた。粋な曾祖母からのプレゼントだったなと今でも思い出したらクスッと笑ってしまう。「青虫くん、山口からはるばる京都までようこそ！」と、長旅をした青虫をねぎらって、来る度に姉と観察を楽しんだ。

九十歳を過ぎても元気に畑に出ている曾祖母が二年前の夏頃からあまり食べられなくなり、足腰も弱くなって畑に行けなくなった。帰省した際には、ベッドに横たわる曾祖母の手足をさすりながらたくさん話もした。「いおりちゃんの手は白くてきれいじゃねえ。おばあちゃんの手は細くて汚くなってしもうたよ。」畑で大きな鍬を振り上げたり、重たいお米を精米したり、あんなに力持ちだった曾祖母の手がとても細くて小さく見えたのは悲しかったが、とてもきれいな手だった。

新年をみんなで楽しく過ごして、少し暖かくなって来た頃、曾祖母は眠るように旅立っていった。「いつも畑にいる汚いババアよ。」と言っていたが、私にとってその姿は最期までと

でも強くて品のある美しいおばあちゃんだった。私は最期に頭をなでて、手を握ったがやはりその手は細いけれど、とてもきれいで優しい手だった。

曾祖母を空へと見送った日、ずっと咲くことを楽しみにしていた庭のしだれ梅が一つだけ咲いているのを見つけた。「おばあちゃんも見ているといいな。」と心の中で思いながら私は空に向かって思いっきりピースをした！

## 講評

曾祖母と宝探しでもするかのように夏野菜を収穫した思い出を綴る。そんな時間が好きだったと感傷にひたる。野菜に悪さをする青虫にも命があることを訴え逃がしてやると、青虫がついたキャベツが届くようになったと思いきや、その元気だった曾祖母が年齢とともに体が弱っていく描写も丁寧である。命を大上段に描かなくて、命の大切さを横から感じさせてくれる、ほのぼのとしたあたたかい。末尾のしだれ梅のエピソードもうまい。



# 優秀賞・選考委員特別賞

## いっしょうけんめい、うまれてきた

神戸市立星和台小学校 一年一組 小林 暖

このふゆ、わたしのおとうとがうまれました。さいしょ、ママのおなかにあかちゃんがいるときいても、よくわかりませんでした。びょういんへいっしょにいって、あかちゃんのおしんぞうのおとをきいたり、えこーでかおをみたりしました。「ほんとうに、おなかにいるんだ」と、ふしぎなきもちになりました。「うれしい」といったのに、ママはなっていました。「なんでなくの」ときくと、ママはおそらにかえったあかちゃんのはなしをしてくれました。わたしとおとうとのあいだに、もうひとり、あかちゃんがいたそうです。そのとき、みんながげんきにうまれるわけじゃないとわかりました。だから、おとうとがうまれるまで、いっしょうけんめいおうえんしました。

うまれるひ、ママはとでもしんどそうで、ちがいはいって、こわかったです。でも、パパといっしょに「がんば

きもちをたいせつにしたいからです。

### 講評

この冬、弟の誕生に立ち会った際、いのちの大切さを実体験として知るとともに、自分と弟の間に、おそらにかえったいのちの存在を知った。母から、「ひなたはママのたからもの」という言葉ももらい、自分もみんなも一生懸命産んでもらったことを認識し、それらの経験から「しね」という言葉を絶対に使いたくない、という感情に至る様子を綴っている。素直で子供らしいあたたかい作文である。



れ」となんかいいいました。うまれたとき、あかちゃんはおおきなこえでなっていました。わたしはへそのおをきりました。へそのおは、あかちゃんとママがつながっている、そこからげんきをもらっていたときいて、おどろきました。

ママはまたないういて、「ひなたはママのたからもの」といってくれました。どうしてそういってくれたのか、すこしわかりました。

がっこうでは「しね」ということばをつかうひとがいます。それはとてもかなしくて、いやなことばです。おとうとみたいに、わたしもみんなも、がんばってうまれてきました。わたしもみんなも、だれかのたからものです。わたしは「しね」ということばはぜったいにつかいたくないです。いっしょうけんめいうんでくれてありがとう、という

# 優秀賞・選考委員特別賞

## 命のみまもり隊

私立京都女子大学附属小学校 三年二組 中井 愛佳

私のおばあちゃんは、お弁当を運んで届けるお仕事をしています。お年よりの家に行って、「こんにちば。」とあいさつをして、お弁当をわたします。おばあちゃんは、どんな日でもここにこしています。暑い日も寒い日も、かさをさしても、車に乗っても、毎日いそがしそうです。自分のお昼ご飯を食べる時間もないほどいそがしいようです。

「お弁当って、食べ物だけじゃなくて、心もいっしょに届けているんだよ。」

と、おばあちゃんが、私に言ったことがあります。

私も、夏休みにおばあちゃんの仕事を見に行ったことがあります。車に乗って、お年よりの家に行くと、げんかんで待っている人がいました。

「今日も来てくれてありがとう。」

そう言うと、私のおばあちゃんの手をにぎって、うれしそ

うにわらっていました。

別の日には、チャイムをおしても返事がなくて、おばあちゃんがしんぱいして戸を開けると、中でおれたいた人がいたそうです。すぐに救急車をよんで、命が助かったと聞きました。

おばあちゃんは、毎日お弁当を運んでいるけれど、それだけではないと私は思いました。おばあちゃんは「命のみまもり隊」なんです。私のおばあちゃんは、みんなの命をささえています。一人ぐらしでさびしいお年よりにとってはおばあちゃんの「こんにちば。」が、一番楽しみな時間なんだと思います。

私は、そんなおばあちゃんのが大好きです。私も、いつか人の命を見守ることができるような人になりたいです。だから、まずは、私がおばあちゃんの見まもり隊です。

おばあちゃんが、いつまでも元気でいられるように、「おはよう。」と言ったり、「むりしないでね。」と声をかけたり、自分にできることをしたいです。私の大好きなおばあちゃん、どうかこれからもずっとと元気でいてくださいね。

## 講評

お弁当を届ける祖母の仕事に夏休みに同行し、単にお弁当を届けるだけでなく、一人暮らしのお年寄りと挨拶し、無事に過ごしているか確認していることを知り、祖母の仕事は「命のみまもり隊」だと感じた。実際に一緒に行っているのが表現にリアリティがある。

また、自身も祖母のように人の命を見守ることができるような大人になりたいと思い、まずは自分が祖母の「みまもり隊」になると綴る。祖母とのかかわりに好感が持てるし、「みまもり隊」という言葉もすごく良い。



## 天国への直通ダイヤル

私立智辯学園和歌山小学校 六年一組 上村 晃司

ぼくが赤ちゃんのころ、プラスチックでできた赤くて小さいおもちゃの受話器がありました。これは、赤ちゃんが危ない場所へ一人で行かないように、赤ちゃんを囲うベビーサークルという柵の付属品でした。ベビーサークルの内側には、赤ちゃんが遊べる工夫がいっぱい、押すと音楽が流れるボタンや動物のパズルをはめこむ穴がついていました。そして、電話のダイヤルと受話器もついていて、ダイヤルを回して発信したり、「プルルルル。」と電話がかかってきたふりをして受話器をとって話すという電話ごっこ遊びができました。

ぼくが成長した後、ベビーサークルは納戸の奥の方に片づけていました。お母さんの友達に赤ちゃんが生まれたので、ぼくのお古のベビーサークルを使ってもらえることになりました。

ないかと思います。  
赤ちゃんだったぼくは、ひいおじいちゃんが亡くなってしまったことが理解できませんでした。いつもだっこしてくれるひいおじいちゃんがいなくて、ぼくがひいおじいちゃんを探すようにきよろきよろしていることに、お母さんは気づきました。

「ひいじいじ、天国におるんよ。お電話プルルルってしてみよっか。」  
と、お母さんが言ってくれました。ぼくは、赤い受話器を持ってダイヤルを回してひいおじいちゃんに電話をかけました。いっぱいひいおじいちゃんに電話しました。この大切な思い出を忘れないように、お母さんが受話器をぼくに残してくれていたのです。

ぼくの手のひらは大きくなって、赤い受話器はとても小さく軽くなりました。でも、受話器はあたたかくて優しい感じがして、静かに待っているとまた電話が鳴りそうな気がします。

### 講評

ベビーサークルの付属品おもちゃの受話器をひいおじいちゃんとの思い出として、母が残してくれた。小6になり「ぼくの手のひらは大きくなって、赤い受話器はとても小さく軽くなりました。」と綴ることで、時間の厚みが感じられ、「いのち」と書いていなくても、行間から見えてくる。押しつけがましくない作文である。徹頭徹尾具体的な情景とともに描かれており、話のつなぎ方もうまく、素晴らしい小説のようだ。

この時、お母さんは赤い受話器だけ、ぼくの手元に残してくれました。なぜなら、この受話器は特別だったからです。

ぼくが生まれた七か月後、ひいおじいちゃんが亡くなりました。ぼくはひいおじいちゃんにだっこしてもらったこと、名前を呼んでくれた声、何も覚えていません。ひいおじいちゃんは、ぼくが生まれた時、すでに癌だったようです。きつと体中の細胞が悲鳴を上げていたはずなのに、家族には調子が悪いことを黙っていました。そして、ひいおじいちゃんは、ベッドから起き上がることができなくなったので病院に緊急入院しましたが、あつという間に亡くなってしまいました。きつと家族に迷惑をかけたくなかったのと、毎日ぼくをだっこするのを楽しみにしてくれていて、痛みと苦しみを限界ぎりぎりまで辛抱していたのでは

# 優秀賞・選考委員特別賞

## 人それぞれ

今まで自分のことをふり返ったり、これからの将来についてなど、あまり考えたことはありませんでした。でも中学生になって、小学校の時とは勉強の難しさや課題の多さも全然違って毎日忙しく必死に生活していく中で、ある日、母と話す機会がありました。その時、母は僕の特性について教えてくれました。僕には一歳上の兄と四歳下の弟がいるのですが、兄弟と少し違う部分があるのは何となく分かっていました。僕には一歳上の兄と四歳下の弟がいます。なので、その時にお母さんに僕の特性について詳しく聞いてみました。

僕は「学習障害」という発達障害があるそうです。発達障害とは、脳の作りが少し通常と違うことから発生する生まれつきの障害のことで、現代の医学では、服薬によって症状を軽くすることは出来ても、完全に治すことは不可能

をして僕の支援について考えてくれています。そのお陰で勉強は難しく大変なことはあるけど、毎日困ることなく学校に通えています。

そして何より学校生活を楽しく過ごしているのは友達がたくさんいるからです。僕の中学校では、五つの小学校から集まってきました。だから僕の特性を知らない人もたくさんいるので初めは不安もありました。でも学校生活を送っていく中でその不安はすぐに消えました。友達はいつも僕のことを気にかけてくれ、授業で困っている時は優しく教えてくれます。だから僕は友達にとっても感謝しています。

僕のようにあまり困ることなく楽しく毎日を過ごせることが一番だと思いますが、中には、助けを求めるのが苦手な人もいます。発達障害は見た目では分かりにくいのです。なので、他の人に障害のことが知られてもらい理解してもらうことが重要だと思います。これから僕が大人になっていく上で困難なこともあると思います。でも障害があるからあきらめることはしたくないです。何にでもチャレンジしていきたいです。特別扱いをしてもいいのではなく、理解してもらおうことで、特性を持った人が働きやすい環境を一緒に考えてもらえる社会になればいい

三木市内の中学校

ご本人及び家族からのご希望がありましたので、お名前は非公表とさせていただきます。

とされています。

僕の場合は、全般的な知的発達に遅れはないが、漢字の読み書き、語力が定着しにくく、理解するのに少し時間がかかったりします。だから国語の教科書を読んで理解するのが難しい時があります。そんな時は、お母さんに読み方を聞いたり、意味を覚えてもらってその時は理解するのですが、また時間がたつと忘れてしまうことがあります。でも家族に「分からなかったら何回でも聞くんやで。」と言ってくれているので、疑問に思ったことや分からないことは聞くようにしています。

学校生活では僕は普通学級に通っています。通級指導を受けていて、週に一、二回支援してくれる先生がクラスに来て、僕が分からない所や困っていたら助けてくれます。そして定期的に先生と親で学校での生活について話し合い

いと思っています。

## 講評

見た目だけではわかりにくい「学習障害」という発達障害について、自分は友達や先生等、周りの人に助けられて困ることなく楽しく過ごしてこられたが、そんな特性を持った人が生きやすい社会になるよう、その人の特性を理解することの大事さを綴った作品である。自身の障害を公に発表するのは勇気が要ることである。この切実感は障害を持つ本人にしか書けないし、5つの小学校から生徒が集まった中1の時にしか書けない。多くの人に勇気を与える良い作文だと思う。

## 僕の曾祖母

神戸市立大沢中学校 二年一組 福井 近良

僕には祖母が二人います。美和子さんと和子さんです。二人とも年齢非公開放さうです。さらに曾祖母もいます。九十四才で、僕の祖母の中で最も元気です。名前は敬子さんです。

敬子さんは家族の中で一番早起きです。午前四時に起きます。僕は午前四時に起きようと思った事はありません。敬子さんは「明るくなったら、自然に目が覚める」と言うそうです。敬子さんの娘の、僕の祖母の美和子さんは「四時はまだ暗い」と言います。

敬子さんは四時に起きた後、色々な事をします。まず折り紙です。折り紙は最近始めた趣味で篠山から柏原まで車で四十分かけて折り紙の先生に習いに行っています。僕が敬子さんに会いに行くとき100%アメをくれますが、きれいな包装紙で作られた、フタ付きの箱に入れてくれていま

す。しかしアメはこんぶアメでした。僕は「どこで売ってるんや」と思いました。味はこんぶ味です。しかし、せつかくもらったので「ありがとう」と言いました。

五時からいまで折り紙をした後、草ひきをしたり、片付けをしたりします。ものすごく腰が曲がっていて動きもゆっくりですが、色々な事をします。その後、祖母に電話をして「用事があるから車で送って」とか「病院に連れて行って」などと言います。敬子さんは「朝早すぎると良くないから六時まで待っている」と言いますが、美和子さんは「六時も早い」と言っています。僕は六時はまだ寝ています。

敬子さんは、敬老会を「卒業します」と言いやめました。理由は祖父が敬老会に入り、親子二代で入る事になったからです。村で最も老人なのに「敬老会にはもう長い事やっ

たから」とか「年寄りが集まっているから」と言います。僕は入っておいたら良いのにと思いました。

涼しい季節には押し車を押して2km先の「波田のお大師さん」というお地藏さんまで歩いて行き、掃除をします。春と秋にはお地藏さんのエプロンを作って新しくします。

敬子さんは九十四才でしっかり高齢者ですが僕の知っているお年寄りの中で一番元気です。まだまだ命がいっぱいある感じがします。一日のスケジュールでは僕より上です。僕が産まれた時に「死んでしまう前に、ひ孫の顔を見してくれてありがとう」と言っていたようですが、そこから十五年経っています。いまでは五人もひ孫がいます。この調子で命いっぱい長生きしてほしいです。

## 講評

曾祖母は、午前4時に起きて、折り紙、草引き、片づけをする。午前6時まで待ってから、祖母に電話して、用事のために車で送ってもらうか、病院に連れていってもらうように言う。また、涼しい季節には2km先のお地藏さんまで歩いて行って掃除する等、高齢なのに僕の知っているお年寄りの中で一番元気だ。この調子で長生きしてほしいと綴る。

曾祖母の日々の生活を少しコミカルに描いた、ユーモアにあふれた面白い作文である。



## 生きるってなんだろう

大津市立仰木中学校 三年三組 遠野 美伶

生きるってなんだろう。生きる意味ってなんだろう。そう考えたことがあった。生きることは時に、息苦しさや違和感に満ちている。周りの期待や社会のルールに従って生きる事が、どうしてこんなに苦しいのだろうか。

「普通でいなければならぬ」と思っている自分がいる。周りの人が当たり前でできていることを、自分にはできない。そう気づくたび、無力感に襲われる。人との会話でも、何を言っているのか、どう振る舞えばいいのかと考えると、何も言えないことがある。相手の期待に応えられなかったり、自分はもういらぬんだ、などと考えていると、だんだん心が疲れていく。

周りから見ればなんてことないことで悩んでいるように思えるのかもしれない。でも、その「なんてことない」が私にとっては大きなハードルなのだ。小さな不安や違和感

が積み重なって、気づいたときには心の中に大きな穴がぽっかり空いてしまう。自分がどこに向かっているのか、何をしたいのか、何をゴールにしているのかもわからなくなってくる。

「どうして自分は今にも生きづらいのだろうか」と考えることがある。私は中等度の社交不安障害（SAD）と診断されていて、そのせいだ、と一時期は思っていたが、病気のせいにはしたくなかった。だから、そう考えてしまっただけは何もできず、一人ベッドに眠ることが多い。

生きづらさは、決して一度で解消されるものではないと思う。毎日を過ごす中で、少しずつ少しずつ、歩いていくしかないのだろう。無理に自分を変えようとするのではなく、自分を大切にすること、無理なく息をできる場所を見つけることが大切だと思う。

そう一度は思えても、「生きづらさ」は消えることはなく、ただその中で少しずつ折り合いをつけていくことが、私たちにできることなのかもしれない。生きることにそのものが、時に大きな大きな重荷に感じられることがあるけれど、それでも少しずつ、一歩ずつ進んでいくことが、私にとっては大きな前進なのだと感じる。小さな一歩が積み重なれば、いつかは大きな変化になるのだと思う。

ごく稀に、誰かに話を聞いてほしくて、自分の部屋に母を呼び出し、相談をすることがある。数か月前、「生きる意味なんてない」と伝えると、母は泣き出してしまった。「そんなことを言ったら、私だって生きる意味がなくなる」と。ああ、そうか。私は誰かの生きがいになれていたのか。じゃあ、意地でも生きないといけないな。そう思った。そりゃあそうだ。大切な大切な愛娘に、「生きる意味なんてない」と告げられたら、辛くて辛くてたまらない。本当に、母には申し訳ないと思っている。私はよく親に何らかの形で、「死にたい」とぼやくことがあるが、その度に父に「意地でも生きろ。死にたいなんて二度と言うな」と言われたことがあった。私は、ずっと支えてくれている人達への恩返しとして、生きないといけないのだと感じる。

それでも、「生きづらさ」を完全に消すことはできない

## 講評

のかもしれない。しかし、少しでも自分を大切にし、無理せず生きることができたなら、それが一つの救いになると感じる。そしてどんなに小さな幸せでも、それが私たちの生きづらさを和らげてくれるのだろうか。

人の命に関する重い問いから始まる作品。作者は、中等度の社交不安障害（SAD）であり、病気のせいにはしたくはないが、生きづらさは決して一度で解消されるものではないと綴る。無理に自分を変えようとするのではなく、自分を大切にし、無理なく息ができる場所を見つけることが大切だと考えている。また、自分が母の生きがいになれていたのだから、意地でも生きないといけないという思いに至っている。

生きづらさを抱える他の多くの人の救いにもなりうる作文である。

## わたしのなかのミヤクミヤク

神戸市立北須磨小学校 一年二組 志儀 陽鞠

いのちにかたちがあるならば、わたしはミヤクミヤクみたいなかたちとおもう。あかいろとあおいろでモクモクして、わたしのなかでごはんをたべたりねたりしている。そして、わたしがげんきにあそべるように、からだのすみずみに「ち」とどけてくれている。

「いのちってどんなかたちとおもう？」

とママにきいてみた。

「まるくてきらきらして、しんじゅみたいだとおもおう。」

とママはいった。わたしは「そんないのちのかたちもいいな」とおもった。こんどはパパにいのちのかたちをきいてみた。パパは、

「わからないよ、ハートかな。」

といった。「ママやパパがおもういのちのかたちとわたし

がおもういのちのかたちは、ちがうんだな」とおもった。

まわりのおとなから、どのいのちもなくならせつたいにもどってこないともたいせつなものだとおしえてもらった。だから、わたしのなかのミヤクミヤクがげんきでいるために、まいにちごはんをしっかりとたべてたくさんねようとおもう。

## ぼくの声

野洲市立野洲小学校 一年三組 上田 暁右

「しずかにしなごー！」

ふざけて大きな声を出すと、ママにいつも怒られる。ぼくが大声を出すのは、ぼくの声がだれにも届かない気がするから。ぼくの声は、風みたいにすぐに消えるのかな。

うちには、アレクサという弟がいる。彼はしゃべる箱なのに、ぼくよりもみんなにたよられている気がする。「タ

イマーお願い」「音楽かけて」って言うとすぐ返事をする。家族はアレクサとはよく話すけど、ぼくの言葉には気づかないことがある。だから、わざと大きな声を出す。でも「うるさい！」って言われて、ちょっとイライラする。ときどき「アレクサなんていらない」ってつぶやいてつぶやいてしまうことがある。

ある日、学校から帰ると、ママがソファでねていた。「熱があるかも……」って言ったとき、ぼくはびっくりした。お姉ちゃんは冷ピタをはっていたけれど、ぼくは何もできなかつた。ただそばに立って、ママの手をにぎって、小さな声で言った。

「ママ、早く治って。ぼくいつもうるさくてごめん。でも、ママのこと大好きだよ。」

ママは目を開けてほえんだ。「ありがとう。やさしいね。」って言うてくれた。その言葉は、アレクサへのモヤモヤを消してくれた。ママの心に届いたのは、アレクサじゃなくぼくの声だった。

次の日ママは元気になった。またアレクサにばかり話しかけているけど、もうイライラはしない。ぼくの声が届いたことをぼくは知っているよ。それから、アレクサにも、ちょっとやさしくなれた。ぼくの声は生きている。風みた

いに消えることもあるけど、心に残ることもあるってぼくは知っている。ぼくは、アレクサみたいにすぐ返事はできないけど、誰かの気持ちをあたためたり、元気にしたりできるんだ。

## いのちがいつばい

神戸市立魚崎小学校 二年二組 中面 愛

わたしは夏休みに「カレーライスを一からつくる」という本を読みました。「一から」のいみは、やさいはたねから、おこめは田んぼづくりから、お肉はヒナからそだてるということです。どうして「ゼロから」ではないかというとなにもないところからたねやいのちはつくれないからです。一からつくるってどのくらいじかかんがかかるだろう。

わたしがすきなカレーライスは、おかあさんがつくってくれるじゃがいもと人じんととり肉のカレーです。つくるのにかかるじかかんをおかあさんに聞いたら、

「一じかんぐらいかな。」

と聞いていましたが、本では一からなので9か月もかかっていました。一じかんでつくれるのは、色んながいのち

をそだててくれたからということに気づきました。今までお世話になった人はすこしだと思っていたけれど、じつはこんなにたくさんお世話になってる人がいました。たとえばやさいのばあい、たねをうえてそだてる人、土やひりょうをつくる人、やさいをとどける人などです。色んな人がいるから食べものを食べることができるとだね。

この本は、しょくぶつにもいのちがあることを教えてくれました。しょくぶつにいのちがあるということは、やさいやおこめにもいのちがあつて、お肉になるどうぶつにもいのちがあります。カレーライスを食べることはいのちを食べることです。いのちをのこすことはよくないから、のこった食べものはぜんぶ食べてあげたいです。

がっちゃんのいのちがなくなったら、どうなるのかな。はねがぜん部ぬけるのかな。からだは、ぬるぬるになるのかな。ぼくには、まだわからない。がっちゃんに会えなくなったら、ぼくはどう思うのかな。考えると苦しい。これが心にあながあくという気もちなのかな。ぼくは、いっぱい泣くのかな。泣くのはちよつとはずかしいから、がまんするかもしれない。

がっちゃんのいのちが消えてしまった世かい。ぼくの中に、がっちゃんがいることがわかる。手は、もふもふの温かさをおぼえているし、耳は、へたなうたをおぼえている。目をとじたら、すぐにがっちゃんのおだつてうかぶ。生きてるかぎり、がっちゃんはきえない。そつかんがえると、元気になれるよ。だから、がっちゃんのいのちはきえないよ。

## ずっと笑顔でいてね

姫路市立安室小学校 四年二組 山下 莉世

今年、ひいおばあちゃんは百才になります。去年、たくさん人が集まって、白寿のお祝いをしたので、今年は、ひ

## がっちゃんのいのち

神戸市立神の谷小学校 三年一組 直原 仰志

ぼくは、「がっちゃん」というオカメインコをかつている。ぼくらは、すごくなかよしだ。がっちゃんは、いつもぼくをさがしてくれて、見つけると、せつたいにそばにきてくれる。朝だって、ぼくが起きたら、その音にはんのうして、ソワソワしだす。ぼくが起きあがって、がっちゃんのいる部やに入ると、「ピーピー」とよるこんでくれる。うたもうたってくれる日もある。がっちゃんのうたはへたっぴだけど、ぼくは、すごく好きだ。

がっちゃんからだは、もふもふしてあたたかい。さわると、とってもきもちいい。十三才だとおかあさんが言っていた。ぼくより、じつは、お兄ちゃんだ。だけど、もふもふのかわいいがっちゃんは、赤ちゃんに見える。おかあさんが、「がっちゃんはよわつてきているから、いなくなるとかわからないよ。」と言っけど本当なのかな。

孫までだけでお祝いをしました。千葉や新潟からも来てくれました。

最年少の私と同年のいとこが代表で花束をわたすと、ひいおばあちゃんはニコニコしてお返しに、「しらさぎの城」という歌を歌ってくれました。

ひ孫九人、孫五人、娘一人、たくさんの人に囲まれて私は幸せだと泣いていました。病気で死んでしまったおばあちゃんのお姉さんの写真を置いて、一緒にお祝いをしました。でも、おばあちゃんのお姉さんが今ここにいない事がさみしいと泣いていました。

血はつながっていなくても今一緒にお祝いをしているおじいちゃん、お父さん、おじさん、おばさん達…。この中の誰か一人でもいなかったら、今のこの場所はなかったんだなあ…。ひいおばあちゃんが泣いているのを見ていて思いました。

これが命が続いているということかなと思いました。私は十才で、ひいおばあちゃんの十分の一しか生きていません。たった十年なのに、うれしい事も楽しい事もたくさんあったし、くやしい事、つらい事やさみしい思いをした事もたくさんあった気がします。

ひいおばあちゃんは私の十倍、苦しい事もつらい事も、

楽しい事もうれしい事もあったんだろうなあと思います。  
た。

百年ってすごいなあ。

ひいおばあちゃんが百才でも元気なのは、おばあちゃんが毎日ひいおばあちゃんの健康を考えてごはんを作っているからです。

ひいおばあちゃんがつまづいたりしないように、床に物を置かない事を家族、皆が気をつけています。今も自分の力で歩けるから、百才でも元気なのだと思います。

お姉ちゃんがお茶をたててあげたり、私とオセロで勝負をしたり、皆でお菓子を食べながら、たくさん笑って、話をするから元気なのだと思います。

「いのち」は、本人の今を幸せだと思える心、そしてそれを助けて支える周りの力で守られているのだなあと思いました。

「百寿」の次は、百八才の「茶寿」の祝いです。

それをまた皆で祝えるように、ひいおばあちゃんの幸せ、

世界はこんななのか、頭がこんらんする。命は平等ではないのではないか。

その答えを探したくて生命に関する本を取った。一秒に四・二人の命が生まれる一方、五歳までに亡くなる子どもは年間四百八十万人もいると知った。しかもその多くは、安全な水やワクチンさえあれば助けられるという。やはり、生まれる場所がちがうだけで、生きられない子どもたちがいるのだ。「八十二億の命を平等にしたい」そんな思いで心がいっぱいになった。

でもどうすれば平等になるか全然分からず、私は、これまで学校で学んだことの中に、ヒントを見つけようと、頭をグルグル回して考えた。地球は、水を中心に命と自然がまあるくつながり、じゅんかんしている美しい星だ。人間には水を浄化したり、食料を流通させる知恵がある。でも同時に、豊かさをひとりじめしたり、むだにしたり、環境をこわして、平和なじゅんかんを止める力もある。つまり、全てを丸く平和にまわすことも、こわすこともできるのが人間なのかもしれない。そして、その、ひとりじめにしようとしたり、こわす、という人間のとくちょうが、命の平等を生んでいるのではないか、と思った。そして、私もその人間の一人であると気づいた時に、ドキッとした。

「いのち」をすぐ側で守ってあげたいと思います。

ひいおばあちゃん、ずっと笑顔でいてね。

## 八十二億の命を平等にしたい

私立同志社国際学院初等部 四年一組 福田 恵万

ようち園のころ、ガリガリにやせ、静かに涙を流すアメリカの赤ちゃんがテレビに映った。私はその映像に釘付けになった。心ぞうがバクバクして、心がヒリヒリした。母から、「世界には食べ物やお水やお薬がなくて亡くなってしまふ子どもが沢山いる」と教えられ、びっくりした。あの赤ちゃんは元気かなと、今でもしょっちゅう思い出す。小学校に入ると、テレビで「戦争」という言葉をよく聞くようになった。ウクライナやガザの映像が流れる。小さな命が失われ、白いシートにくるまれる。白いシートがならべられる。まるで命が物になったように見える。どうして

毎日当たり前のように水道水を使い、クーラーの中で美味しいご飯を食べて、おやつまで食べて、車や飛行機で好きに出かけて幸せに生きている。沢山の二さん化石を出しているし、食べなくていい物まで食べている。私の命は、地球に、そして、地球上の全ての人々の平和で平等なじゅんかんのために、どんなえいきょうをあたえているのだろうか。どうすれば私は、「良いじゅんかん」の一部になれるのだろうか。節水節電したり、けん金したりしているけれど、それでは、全然八十二億の命の平等には近づけない気がする。もっと、国と世界全体で大きな動きをしないと、どうしようもない気がする。まだ答えは分からないけど、考え続けて、行動することで、私は、平等な世界の一部になりたい。

## あきらめてきた私から

### あきらめない私へ

神戸市立塩屋北小学校 六年 中川 紗希

私は今、小学六年生だ。ようち園の年長のころ、新型コロナウイルスがはやった。卒園式まであと少しなのに、卒

園式の練習は動画を見て、練習した。卒園式本番で初めてみんなで声を合わせて歌った。

その春、小学生に上がったのに、入学式は行われなかった。小学生になったという実感もなのまま、家での勉強が始まった。同じ小学校に入るおさななじみとビデオ通話と一緒に勉強することにした。同じクラスの子の顔はほとんど知らない。ニュースを見ては、感染者数や死者数の多さに悲しくなり、ウィルスがこわくなった。だから外に出ること、人に会うこと、たくさんのお話をあきらめた。ようやく学校に通えるようになって、マスクをしているし、きよりとらないといけない。給食も前を向いてだまって食べた。だから、友だちの顔は一部分しか知らない。そんな友だちが学校を休むと『気分がないうちに私がうつしてしまっていないかな』『大じょう夫かな』『苦しんでないかな』とすごく心配になった。

そして、私の学校では、少しずつクラスの半分だけが参観できたり、学年ごとに音楽会が開かれたり、二学年ごと

が見えなくて苦しくて泣いたこともある私だけれど、あきらめていたことが、いつの日かできるようになることを知った私だから、この夢をあきらめずに、いつかかなえない。そして、医者になったら、病気をたたかう人と一緒に、生きることをあきらめない医者で私になりたい。

## 一番大切なもの

私立智辯学園和歌山小学校 六年一組 秦 史帆

そろばんの夏季大会の日、私は自分の部屋で読み上げ暗算の練習をしていた。大会に向けて集中していたその時、隣の部屋から、ガタン！という音がして、すぐに妹の泣き声が聞こえてきた。私はすこしぶつただけだろうと思いい、そのまま練習を続けていたが、お父さんの「大丈夫か？」という声と泣いている妹を抱き上げる音が聞こえ、すぐにお母さんが部屋に駆けつけて「頭から血が出てる！」と叫んだ。その瞬間、私は事の重大さに気づき、急いで妹の元に駆け寄った。何をしたらいいかわからず、とりあえずタオルを持って行ったり、お母さんの指示に従って動いた。お父さんが「結構血が出るぞ！救急車！」と叫んだ時、

に運動会が開かれるようになった。やっと友だちの顔全部が分かるようになった。運動会も音楽会も、クラスの半分でもなく、学年ごとでもなく、二学年ごとでもなく、全学年でできるようになった今、私は小学六年生だ。入学式を経験しなかった私たちは、今年、新一年生の入学式に立ち合った。たくさんのお話をあきらめてきた私だから、行事ができる喜びを知った。友だちと会えることが当たり前ではなかったから、となりに友だちがいることの幸せを知った。パソコンの中で授業する先生ではなく、目の前にいる先生から勉強を学べるうれしさを知った。そんな私だから、私たちの学年だから、この春、この小学校を全員そろって卒業したい。そこに、私の大好きな先生がいて、家族がいて、皆が笑っていますように。

そんな私には夢がある。多くの人が新型コロナウイルスで苦しんでいる。病気で苦しむ人を少しでも助けられるように、少しでも減らせるように、私は医者になりたい。たくさんのお話をあきらめてきた私だけれど、未来救急隊の人に

「サイレンが聞こえたら、外に出て誘導してください。」と言われ、私は兄と一緒に外に飛び出した。そして妹はお母さんに付き添われて救急車で病院へ運ばれた。お父さんは、兄が英語の授業、私がそろばんの大会という予定があったため、一人で車を運転して病院に向かった。

一時間程して、お父さんが帰ってきたとき、「手術することになった。縫合するぞうだ。」と聞かされ、胸がぎゅつと締めつけられた。その後、兄を塾に送り、コンビ二おにぎりや車の中で食べてから私は大会会場へ向かった。

大会中も妹のことが頭から離れなかった。普段なら満点の問題も気が散ってミスをしてしまった。読み上げ算・読み上げ暗算も、いつもなら絶対に間違えないのに、結果は散々だった。私は表彰式の時も「順位なんてただの数字」と思うほど妹のことが心配でたまらなかった。そろばんは私の特技で誰にも負けないと思っていた。だから和歌山県でずっと一位を取っていた私にとって二位はとても悔しかったけれど、「また頑張ればいい。」と不思議と前向きに思えた。

大会が予定より早く終わったので、家まで二十分程走って帰った。家には手術を終えた妹が待っていた。私が一位をとって帰ってくると思っていた家族は驚いた様子だったが、誰も何も言わなかった。私は自分の部屋に入ると赤ちゃんとみたくに泣いた。大会で負けた悔しさと、妹が無事だった安堵の気持ちで涙が止まらなかった。妹が頭に包帯を巻いている姿を見るたび胸が痛んだ。他人の怪我にはこころで心を動かされなかったけれど、大切な家族の痛みは自分のこと以上に苦しかった。

今回の出来事を通して、私にとって大切なものは何なのかがはつきり分かった。どんなに大会で勝つことがすぐくても、命や家族の無事には到底かなわない。順位や点数は、たしかに努力の結果だけれど、それは「ただの数字」これからもそろばんを頑張っていくつもりだけれど、私は「家族を大切する心」も忘れずに持ち続けていきたい。

慢しました。お父さんは、少し考えて

「その金魚を大切に育てないとダメだよ。」

とニコツと笑って言いました。私は、メダカを飼った事があります。今も水槽の中をスイスイ泳いでいます。けれど、このメダカがこんなにも元気に泳いでいるのはお父さんが大切にメダカの世話をしているからです。本当は私と弟が面倒をみるはずだったのに、いつの間にかお父さんの仕事になっていました。「今回こそは、最後まで私が面倒をみる。」そう決心しました。新しい水槽にお祭りで取った金魚を放してあげます。インターネットで金魚について魚好きの弟とたくさん調べました。名前も付けました。赤色の金魚が四匹と茶色の金魚一匹だったので、赤色の金魚達にそれぞれの名前を付けました。唯一、茶色だった金魚には、「チャイタ」と名付けました。お父さんも私と弟の朝の εργασariを見守ってくれていました。そんな日が何日か続きました。エサを毎日やっついても赤色の金魚が一匹ずつ死んでいきました。金魚の事をたくさん調べて、毎日毎日金魚の面倒をみていたので、とても悲しくて悔しい気持ちになりました。そして、チャイタだけが生き残りました。お父さんがあれほど金魚すくいを止めようとしていた理由が分かりました。「命は買うものじゃない。」そう言いたかつ

## 百円のゴールドフィッシュ

私立智辯学園和歌山小学校 六年二組 齋藤 悠菜

私は、家族とお祭りに行きました。お祭りでは、たくさん屋根が並んでいたけれど、金魚すくいの屋台に行きました。金魚すくいには、お祭りの中でもとても人気があるので、行列ができていました。私も弟もお祭りに来たら、「金魚すくいがしたい。」

とお父さんに頼みます。けれど、お父さんは、「うーん。金魚すくいもいいけど、スーパーボールすくいも楽しそうだよ。」

お父さんの言葉は少し不自然だったけれど、あまり気にしませんでした。また、別の日に友達とお祭りに行きました。お父さんもないし、友達も金魚すくいをしたいと言っていたので、金魚すくいをするようになりました。たくさん金魚がいてワクワクしました。けれど、取れたのはたったの五匹。お祭りが終わってから家に帰ってお父さんに自

たのかなと思いました。死んでしまった金魚を土に埋めながら残っているチャイタだけは長生きしてもらおうと思えました。赤色の金魚達が死んでしまっつから何日かたつてチャイタも死んでしまいました。色々な事に後悔しました。お父さんの言う事を聞かなかった事、命で遊んでしまった事。金魚にストレスをあたえていたのかもしれない。屋台で金魚すくいに使ったのは、五百円。五匹で五百円だから一匹百円。百円の命なんてあるはずなのに私はさらにその金魚をすくつて遊んで祭りを楽しんでいました。だから、次も同じ間違いをしないようにどんな命でもどんな物でも絶対に大切にしようと思いました。

## いのちと戦争と誕生日と

兵庫県立大学附属中学校 一年一組 荻野 佑果

私の誕生日は八月十五日。つまり、あの忘れてはいけなない沢山の尊い『いのち』が犠牲になった憎しみと悲しみと恐怖の固まりの日の最終日だ。私はこの誕生日が大嫌いだった。毎年くる誕生日の時に放送されるニュースはいつも『戦争』についての番組が流れている。テレビには悲惨

な動画や画像、『戦争』を体験した人のインタビューなどが放送されている。誕生日で嬉しくてウキウキしているのに、同時に見える『戦争』と『失われたいのち』の姿。テレビを見る度に私は「こんなにはしゃいで良いのかな…」と思う。『戦争』と『失われたいのち』がいつも誕生日の嬉しさをかき消す。勿論、この日は『戦争』がどれだけ残酷な事か、『戦争』で失った沢山の尊い『いのち』、失った人たちの『戦争』への思いを決して忘れてはいけない理由、などを考えなければならぬ日だという事はよく分かっている。だけど、誕生日への嬉しさもある。もうせっかくの一年に一度の誕生日なのにこんな思いたくない！『戦争』なんて思出し出したいくない！『いのち』についてなんか考えたくない！そう思った事は何度あった事か。

ある日その想いが溢れ、祖母に気持ちを打ち明けてみた。祖母は静かに聴いていた。すると祖母は「まあ確かにそう思うのも無理はないな。やけどなこの日はな『戦争』が終わった最終日。つまりな『戦争』が終わって人々が安心して

## 祖父が教えてくれたこと

私立四天王寺中学校 一年六組 宗方 穂夏

「いのち」ってボーダーラインみたい。

あつちとこつちを一本の線で仕切られて、それを超えたら死んでしまう。それに気付いたのは、大切な祖父の死だった。

無鉄砲の頑固者。それが私の祖父だ。自分にはまあまあ甘く糖尿病を患い、腎不全のために透析治療を行っていた。それに加えて二度ほど脳梗塞を発症。多少の言語障害と歩行の困難が残るものの、殺しても死なないんじゃないかと思うほど、病気には強かった。(病気に強いという表現があっているかは謎だけれど、今思えば生に対してとても貪欲な人だった。)どんな状態でも毎回けろりと蘇ってくる祖父。だから通院しているクリニックや入院している病院から連絡があつて、母がやきもきしていても、全く動じない私になっていた。

夏休みのある日、私は美容室にいた。髪を整え週末のお出かけを楽しみにしていたそんな時、携帯電話が震えた。マナーモードにしていたので、留守電に転送される。けれども繰り返される着信。髪は濡れたままで電話をとる。母

で嬉しさとか幸せを感じた良い日やとも言えるで。『戦争』という悲しい出来事もあるけど沢山の『いのち』が失われてしまう悲しみがなくなった日、幸せの日やとも思うで。」そう話した。確かにそうかもしれない。残酷な日でもあるけれど、幸せの日でもある。そう思うと心が軽くなった気がした。八月十五日は悪い事ばかりの日、ではなかったんだと思った。

『いのち』や『戦争』について考える事はとても大切だと思う。しかし、それと同時に人々が幸せを感じた時を考えるのも大切だと思う。そして、あの時の幸せをずっと人々が感じていられるように。もう二度と沢山の人の尊い『いのち』が失われてしまうような事が絶対にならないように。私はこの想いを受け継いでいこうと改めて思った。

からだ。「今おじいちゃんの病院から電話があつて、透析中に急変したみたい。すぐに病院にきて。」と慌てている。私は、内心どうせ大丈夫。おじいちゃんは不死身だもの。と高をくくっていた。でも母が慌てているのに自分だけ美容室で優雅な時間を過ごしているわけにもいかない。使命感にかられた私は、美容師さんに早口で事情を説明して施術途中でケープをとってもらった。半乾きでもかまいませんと大急ぎで会計を済まし、電車で飛び乗った。病院の最寄り駅に着くまでに、少し焦りも感じていた。駅から急勾配の坂を下って、軽い上り坂を上ったところに病院はある。

ヒール付きのサンダルできたことをひどく後悔した。事情を聞きつけた祖父のお手伝いさんも駆けつけてきたようで、じんわりと額に汗をかきながら病院まで急ぎましようといった。私は、みんな集まってくるなんて、まさか危ないの？と益々不安が募った。履いていたサンダルを脱ぎ、走って病院に向かった。ストッキングは真っ黒になり、底面はガタガタのアスファルトにこすれ破れていたが、そんな事はもうどうでもよかった。

透析室の隣の個室に案内される。そこには、心臓マッサージをされている祖父がいた。でも顔を見ると、眼があいていた。その眼は、魂を宿した

瞳ではなかった。瞳は乾きかけ、マッサージをやめると心拍の波形も動かない。要はもう死んでいる。死んでいるのにマッサージをしてきていた？祖父は透析中に苦しくなったから一旦やめてほしいとお願ひしたらしい。でもどんな事情かやめてくれなかった。何度かお願ひしたらしいが透析を続け、今の状況に至っている。家族が揃うまで、治療をがんばったという演出なのかとさえ思える心臓マッサージ。母は一言「もう死んでいます。これ以上は大丈夫です。」といった。

祖父が死んだ。何度死にかけても戻ってきたのに。昨日の夕方、またねと言ったばかりなのに。リハビリ頑張って温泉いこうと約束していたのに。私の次テストの結果楽しみにしているっていったのに。いろいろあっても大丈夫っていつてくれたのに。小さい頃いっしょに遊んだ思い出、祖父との記憶が波の様に押し寄せてくる。そして出てくるのは後悔という涙。脳梗塞の後遺症で動きずらくなった脚のリハビリ、がんばったら一緒に飲もうと用意していたラ

## いのちの多様性

私立四天王寺中学校 一年七組 井口 董

私にとっていのちとは唯一無二の、人のあり方です。それは、人それぞれ、一人ひとりのいのちは誰か他の人や進化したA Iに復元できるものではなく、その人にしか作りだせないものだという意味です。

私は万博で、未来のいのちの姿について考えてきました。そこには、人が寿命を全うする前にA Iに記憶を引き継がせてその人の思い・いのちを永遠に残すという未来の人の姿がありました。その姿を見ていると、私はA Iは託された「人の記憶」から本当にその人の思い、そしていのちを受け継ぐことが出来るのだろうかとても不安になりました。思いもいのちも受け継いだなら「自分」がもう一人存在するも同然。もう私は必要ないからです。

A Iに記憶を託すと、A Iの中で記憶の持ち主のいのちが存在しているようにみえます。ですが、記憶Ⅱいのちは限りません。

人は日々成長します。しかし、記憶は過去のことなので変わりません。でも、いのちは未来へ続く道のようなものです。生きていれば日々変わります。きっと変わり方は人

ムネ。退去のため病室の冷蔵庫からラムネ瓶を2本取り出しながら、涙がまた溢れてくる。こんなことなら、甘いものも我慢せず、一緒に乾杯しとけばよかった。いっぱいやってあげたいことがあった。なんで？さっきまで生きてたじゃない。祖父の抜け殻が運ばれる。その後をタクシーで走る。と、街は何事もなかったように回っていた。

大切な人がいなくなって、私はこんなに悲しいのに、世の中はまるで祖父がいたことなど知らんぷりしているようで余計に涙が溢れた。

人はいつか死ぬ。それを実感した。命は切れたら動かない。だからこそ毎日が大切に、毎日を優しく生きたいと思った。家族にもできるうちに優しくしなければと思った。人の命は、有限だから。命のボーダーラインすれすれで生きていた祖父が教えてくれたこと。あの日から実践しています。

それぞれなはずです。なので、たとえA Iに記憶を託しても、そんないのちを引き継がせることは本当にできるのだろうかとは私を考えました。

この万博の展示の創設者は「人は自ら未来をデザインし、生きたいいのちを生きられる」と語っています。私も、人自身が未来をデザインして生きたいいのちを生きられるのはとても素敵だと思います。ただ、人が本来歩むはずのいのちや未来を、記憶を引き継いだA Iに委ねて生きたいいのちを生きてもらうのは生きていると言えるのか、というところにまだ答えが出ません。

私は人として、他に自由に増やすことのできないかけがえのない自分という「いのち」を大切に最後まで生きていきたいと思えます。

ただ、私がこう考えるのは、もしかしたら不自由がないからなのかもしれません。不自由になってはじめて自由を求めると思うからです。そして、様々な境遇の人が、より自分らしくいのちを生きる世界になるように願っています。

たくさんの可能性から未来をデザインしていけるよう、今はたくさんの経験を積み重ねていきたいです。

## 逃げるという選択肢

私立西天王寺中学校 一年七組 榎村 希美

みなさんは、生きることのつらさを感じたことはありませんか。そのつらさは今も続いていますか。今、生きることがつらいと感じている人に伝えたいことがあります。それは、「何かに立ち向かうことがしんどくなったら逃げてもいいし、泣いてもいい。でも、生きることだけは諦めないでほしい。」ということですよ。

私は小学校高学年のときに、いじめにあいました。相手は集団で、先生がいない所で暴力をふるってきたり、悪口を言ってきたりしました。あまりにもつらく、朝になると腹痛が起き、学校に行きたくない日々が続きました。自分ではどうにもできず、先生にも相談しました。しかし、信じてもらえず、余計にいじめが酷くなるだけでした。

この時私は、生きることがつらいと感じ、自暴自棄になりました。食欲も落ち、いじめが怖く、夜もなかなか寝られませんでした。必死に勉強しました。そして、春。私は合格をつかみとり、いじめのある環境から逃げ出すことができました。その上、最高のクラスメイト、先輩、先生に出会うことができ、とても楽しい日々を過ごしています。いじめにあったあの時、生きることが諦めなくてよかった、と今は思います。

逃げるのは自分の負けを認めることだと思う人もいるかもしれませんが。でも、私はそうは思いません。逃げることは、自分が生きるための新しい道を見つけることだと思うからです。逃げるのは負けだと思い、しんどいことに立ち向かって、耐えられずに自殺してしまうのは、自分にとっても周りの人にとっても一番つらい結果だと思うからです。自分を守るためなら、たとえ、人から何を言われても、逃げてもいい、泣いてもいいと私は思います。生きることが諦めなければ、いつか必ず、明るい未来がくると、私は信じています。

最後に、いじめをしている人に、一つだけ言わせてください。そこまで重く考えていないかもしれないけれど、いじめは、人の人生を大きく狂わすものです。あなたの言動で、誰かが死んでしまう可能性があります。「いらぬ命なんて一つもない」と私は伝えたいです。

れなくなりしました。そのため、かかりつけの小児科の先生に相談しました。先生は、「あなたの体の不調は先生は治すことができる。でも、いじめっ子達の、人を傷つけないと楽しめないという不治の病は治すことができない。」と言いました。それを聞いて、心の一部が軽くなりました。担任の先生が絶対に来てと言った学校も、小児科の先生は「休んだらいい。」と言ってくれました。

当時の私は、現実から逃げたくて、よく音楽や動画を見ていました。その時、流れてきた動画に『すぐくつらくて、壊れそうなほど苦しくて、エネルギーがゼロになっちゃいそうな時は、逃げるっていう手段もあるんだ。だから、もう無理だっと思って思ったら、逃げていいってボクは思うんだ。』という言葉がありました。しんどい学校から逃げてもいいんだと思うことができ、この言葉にも私は救われました。

この言葉に後押しされ、私は地元の中学ではなく、受験して、いじめっ子達のない所へ逃げようと決意しました。そのため、残りの小学校生活は何が何でも合格してやると

## 他者へのいたわり

私立大阪信愛学院中学校 二年A組 小林 葉子

七月十一日、「療育的ケア児と無理心中を図った母…の初公判」と、見出しのついた新聞記事に目が止まりました。なぜなら、私は「こどもホスピス」で奉仕活動をしており、このホスピスを運営している病院が主催する日本臨床小児緩和ケア研究会に参加し、療育的ケア児とその家族の現状、社会の役割について学んだばかりだったからです。私が奉仕活動を始めたきっかけは、四才の時に母が癌を発症し、不安になっていた私のために、母の主治医の先生が、子どもの目線で優しく寄り添ってくれたことと、同時に「こどもホスピス」で過ごしている子ども達がいることを知ったこと、やがて小学生になりカトリック教育で人を思いやることについて学んだ経験が元になっています。

世界で最初に「こどもホスピス」が誕生したのは、一九八二年イギリスのオックスフォードに設立されたヘレンハウスです。難病を抱える子どもとその家族の困難に気付いたシスターが、「レスパイト（休息）を目的とした患児の一時預かりの場所が必要だ。」と考えたことが設立の理由にあります。今回の初公判の記事には、

「娘が二才七ヶ月の時退院し、七才になるまで福祉サービ  
 スを利用しながら二十四時間介護を続けてきたが、そのほ  
 とんどは母親があたっていた。私と長女は要らない存在だ  
 と感じ、孤独が増幅した母親は娘の人工呼吸器を外した。」  
 と明かされていました。それを讀んだ私は、失われずに済  
 んだはずの小さな命と母親が追い詰められた状況にとても  
 衝撃を受けました。

私が参加した研究会でも、日本は医療的ケア児を受け入  
 れる体制の整った施設が少なく、又、ケア児とその家族が  
 背負う負担に対する社会での認知度の低さが課題になって  
 いました。普段、医療的ケア児に関わる機会の少ない学生  
 の私達も、身近に同じような経験がなければ患児とその家  
 族が直面している辛く苦しい現実を想像したり、気に掛け  
 たりすることはありません。ましてやヘレンハウスと同じ  
 ように、「こどもホスピス」や重度心身障がい児施設には、  
 患児の世話のために家族が地域社会から孤立しないよう  
 に、そして二十四時間介護で疲れている家族へのケアと心

## 命を守るといふこと

京都市立上京中学校 二年四組 岡田 結衣

「以下の地域に津波警報が出ています。ただちに避難し  
 てください。」

テレビから流れるアナウンスに、私は思わず手を止めた。  
 和歌山に津波警報が出たという。画面には避難を呼びかけ  
 るニュース映像が映り、不安で胸がざわついた。和歌山県  
 有田市には、海抜の低い場所に住む祖母がいる。私はすぐ  
 に祖母に電話をかけた。祖母は

「今のところ大丈夫だよ。」

と、いつも通り明るく話してくれた。けれどテレビでは「第  
 二波、第三波にも注意してください。」と繰り返し呼びか  
 けており、本当にこのままで大丈夫なのか、私の不安は消  
 えなかった。しばらくして、警報は注意報に変わり、少し  
 安心した。でも、「逃げて」ともっと強く言うべきだった  
 のではないか、という後悔が残った。命のことを考えるな  
 ら、不安な気持ちを伝えるだけでなく、どう行動するかが  
 大切だったのではないかと考えさせられた。

その時、私は以前教科書で讀んだ一人の人物のことを思  
 い出した。千八百五十四年、安政元年の安政の大地震のと

の拠り所になるといった重要な役割があることもほとんど  
 の人は知らないでしょう。障がいや病気を持っている人が  
 偏見や差別を受けたり、生きづらさを感じていることに、  
 改めて考えさせられました。

私が出会ったお気に入りの一冊の中で、作家の司馬遼太  
 郎は、科学技術が発達した未来を担っていく若者に向けて、  
 「人間が助け合う行動の根っこは、いたわりの感情であり、  
 他人の痛みを共感することである。」と言葉を残していま  
 す。そして、そのいたわりは、訓練をして身につけなけれ  
 ばならないと説いています。物があふれる豊かさ、デジ  
 タル技術はどんどん発展しても、他者をいたわったり他者  
 に共感できる心を育むことを忘れては、社会は成り立って  
 ゆかないと言っているように、私には伝わってきました。  
 この言葉通り、私自身もいたわりの感情を身に付ける努力  
 を重ねながら、「こどもホスピス」での奉仕活動が続けて  
 いきたいと思えます。

き、和歌山県広川町に津波が押し寄せようとしていた。浜  
 口梧陵という人が、逃げ遅れそうな村人を助けようと、とっ  
 さに自分の稲に火をつけ、暗い夜に目印を作って避難を促  
 し、多くの命を救ったという話だ。私は今回の出来事をき  
 かけに、もっと浜口梧陵について知りたくなった。

夏休みに祖母の家へ帰省したとき、「稲むらの火の館」  
 という資料館を訪ねた。そこには「津波防災教育センター」  
 も併設されていて、津波の怖さだけでなく、そこから命  
 を守るためにできることがたくさん紹介されていた。浜口  
 梧陵のことを改めて知る中で、ただ勇敢な人だったのでは  
 なく、「いのちを何よりも大切にする」人だったのだと感  
 じた。津波のあと、梧陵は自分のお金を使って堤防を築き、  
 また次に津波が来ても村の人たちが助かるように備えた。  
 その堤防は、後に実際の災害で再び多くの命を救うことにな  
 ったということも知った。私は実際にその堤防にも足を  
 運んだ。きれいに整備はされてはいけれど、命を守りたい  
 という強い願いが今もそこに生きてるように思えた。

また、浜口梧陵は防災だけでなく、教育にも力を注いだ  
 人物だったことも知った。私の母の出身校である耐久高校  
 の前身、「耐久社」も彼が設立した学校だと聞いたときは  
 とても驚いた。命を守ること、そして未来を育てること。

どちらも同じくらい大切だということを、梧陵は行動で示していたのだと思う。その姿に触れ、私にとって浜口梧陵は、遠い昔の偉人ではなく、今を生きる私たちにも多くのことを教えてくれる身近な存在に感じられるようになった。

この体験を通じて私は、過去の出来事から学ぶ重要性、そして防災の備えが命を守ることに繋がるということを、身をもって実感した。帰省中には祖母と一緒に非常食や懐中電灯、水などを準備し、有田市のハザードマップを見ながら津波や台風、地震のときにはどこへ逃げればよいのかを話し合った。

祖母は三年前に祖父を亡くし、今は一人暮らしだ。よく、「膝が痛い」と話していたのでもしもの時に使えるように杖を玄関に置いておくことも提案した。近所の人と声をかけ合いながら助け合って避難することも大切だねと祖母と話した。

あの時、私は「逃げて」としか伝えられなかった。防災

## 苺

兵庫県立芦屋国際中等教育学校 二年 森岡 美穂

私は曾祖母のことをよく覚えていない。写真を見ると思い出すくらいだ。無理もないかもしれない。曾祖母が亡くなったのは、私が小学一年生の時だ。曾祖母のいる老人ホームは遠かったし、まだ、死という言葉も理解していない。軽々しく、

「私が大人になったらおばあちゃんはどう死んじゃてるね。」

などという残酷な言葉を言えるくらいだった。曾祖母が亡くなったと知ったときも、涙を流すことはなかった。だんだんと曾祖母の死を忘れていき、普段通り過ごすようになった。時が経つにつれて、死という言葉もわかるようになり、自分の飼っている金魚が死んでしまった時に、わんわん泣いたのを覚えている。ある日、デザートに苺がでたときにふと、曾祖母のことを思い出した。確か、私が小学一年生のころの夏だったと思う。夏休みに家族で帰省した時のことだ。

祖父が苺狩りに連れて行ってくれた。私は白い苺が気に入りに、白い苺ばかり食べていた。とても甘くて美味しい

について深く知らなかった自分が悔しかった。でも、浜口梧陵の防災の精神と「稲むらの火」の人命尊重の思いに触れ、そして実際に行動することで、次からはもっと具体的に「どこに逃げるべきか」「どんな準備が必要か」を伝えることができる気がしている。

私は稲むらの火の館で学んだことを通じて、「来たるべき津波被害から命や暮らしを守る」ことの大切さを学んだ。そして、浜口梧陵の「すべての命を守りたい」という防災への想いと、未来を担う人々への教育への願いに深く心を打たれた。

私の心にもあの日の火のように、消えることのない「稲むらの火」を灯していきたい。いつか誰かの命を守るように、これからも学び、備え、行動できる人でありたいと思う。

苺だった。すると、ある考えが思い浮かんだ。ひいおばあちゃんに食べさせてあげよう。そして、大きくて形がきれいな苺を四個選んで容器に入れた。そして、祖母にそのことを話すと、帰り道に曾祖母のいる老人ホームに向かうことになった。自分から提案しといてなのだが、人見知りのせいもあってか、曾祖母と少し気まずくて、そこまで乗り気ではなかった。老人ホームで曾祖母に会ったときも、両親にひつついてあまり話そうとしなかった。今思えば失礼な態度だったと思う。意を決して、苺を祖母に渡すと、とても優しい笑顔で、ありがとうと言ってくれ、苺を一つ食べてくれた。ただ、残りの三つは食べてくれなかった。幼心にも、私の態度がいけなくて怒っちゃったのかなと後悔した。そんな私の様子をみかねてか、曾祖母は、とってもおもしろかったよ、と優しく言ってくれた。その言葉を聞いて、私はとっても幸せな気持ちになった。また会った時は、ちがう果物を持っていこうかなと思いつきながら兵庫に帰った。その何か月かした後、曾祖母は亡くなってしまった。その頃の私は死なんて軽いものだと思っていたし、また少し経った後に会えると思っていた。だから、涙は流れなかった。また会えると思っていたから。そしてそのまま忘れてしまった。

思い出して、とても後悔した。もちろん、曾祖母が亡くなった実感が湧き、悲しくなったのもあったが、時が経つにつれ、どんな思い出も色褪せ、やがて忘れてしまうことが、一番悲しくて、悔しかった。

その後、一つ分かったことがある。私が苺をあげた時の曾祖母は腎臓が悪く、塩も砂糖も自由に食べてはいけなかったということだ。それが分かった時に初めて曾祖母が一つしか食べなかった理由が分かった。私は疑問に思った。どうして私があげた苺を食べてくれたのだろう。たまにしか会えなかったし、たまたまに会った時も失礼な態度をとってしまったのに。自分の身体が悪くなるかもしれないのに。どんな人も口を揃えて身体を大切にろと言うのに。この疑問の答えはどんなに探しても見つからない。ただ、一つ見つかったことがある。思い出は、どんなに色褪せても繋いでいなくてはならない。人が生きた証を残さなければならぬ。だから、私も繋いでいこうと思う。

涙が出そうになる。そういう時だけ「ああ、心はまだ動いてるんだな」って、ぼんやりと思う。誰かにこの気持ちを思っても、言葉にできない。うまく伝えられないし、きつと「大丈夫」だと言って言われて終わりだろう。その言葉が、かえって自分を追いつめるような気がする。だから結局誰にも言えずに、このモヤモヤした気持ちを一人で抱え込んでいる。「いのち」って本当はもっとキラキラしていて希望に満ちたものなんだろうか。自分は、その輝きをまだ見つけられていないだけなのかな。それとも自分にはもともとそんなものはないで、このまま暗いトンネルの中を歩き続けるのかな。でも、心のどこかでほんの少しだけ期待してる自分もいる。いつかこのトンネルの先に光が見えるかもしれないって。ほんの少しだけいいから、心が軽くなる瞬間が来るかもしれないって。

「いのち」には終わりがあるって言うけれど、それもなんだか現実感がなくて、ピンとこない。自分にとっての「いのち」はただ続いているだけの重たい荷物みたいだ。でも本当に「いのち」に意味がないのならどうして自分は毎日を過ごしてるのだろう。どうして苦しくても息をしているのだろう。もしかしたらこの苦しみや悲しみも、「いのち」の一部なのかもしれない。明るい光があるからこそつらい

## 自分が生きる意味

彦根市立西中学校 三年 廣渡 慶悟

最近そんなことばかり考えてしまう。朝、目が覚めても、別に楽しみなことなんて何も無い。学校に行っても、みんなが笑い合っているのが、なんだか遠い世界の話みたいに聞こえる。教科書には「生命は尊い」とか書いてあるけど、それって本当にそうなのかなって心のどこかで思っている。自分の命は、ただ毎日を繰り返すだけの、つまらないものに感じられる。誰かと話していても心から笑えない。SNSでみんなが楽しそうな写真をアップしているのを見ると、自分だけが置いていかれてるみたいで、余計に孤独になる。生きていて、こんなに息苦しくて、つらいことなのかな。でもたまにふと立ち止まる瞬間がある。帰りの道、電車の窓からぼんやり外を眺めていると、夕焼けがすごく綺麗で一瞬だけ心が動く。自分の部屋で、好きな音楽を大音量で聴いていると、歌詞に自分の気持ちが重なって

ことも感じるのかもしれない。今はまだ影の中にいるけど、この影があるからこそいつか差し込む光がもっとまぶしく感じられるかもしれない。

## 山が教えてくれたこと

兵庫県立大学附属中学校 三年二組 松田 伶菜

去年の秋、父と山へハイキングに行きました。朝は冷たい空気に包まれ、足元の落ち葉がカサカサと音を立てています。歩きながらふと空を見上げると、木々の葉は赤や黄色に染まり、太陽の光りに照らされきらきら輝いていました。その美しさに私は、思わず立ち止まってしまいました。

山道を進むうちに、大きな杉や広葉樹、苔に覆われた石や岩が目に入ってきます。種類が同じであっても、色や形はみんな違って。それぞれが自分の個性を出して立っている姿に心を奪われました。それと同時に、枯れた木の横からは小さな芽が伸びていて「命は終わっても、新しい命が始まるんだ」と感じました。

途中、倒れた木の幹を見つけました。表面は茶色く乾い

ているのに、近づくとその木の中にはキノコや小さな虫たちが暮らしていました。最初は「もう死んでしまった木」だと思っていたのに、その木は別の命を育てる場所になっていたのです。自然はこのようにして、命を何度も循環させているのだと知りました。

山頂に着くと、どこまでも続いていくような美しい景色に魅了されました。遠くまで広がる森や田んぼ、川が一本の線のように流れ、その向こうには町がありました。「私たちの暮らしは、全部自然の中にあるんだ」と思うと、不思議な安心感が広がりました。

帰り道、黄色い葉がひらひらと舞い落ちてきました。葉っぱは地面に落ち、やがて分解され養分となり、また新しい木や草花を育てます。自然の中では、命の終わりは次の命の始まりでもあるのです。

私たち人間も、この循環の中で生きています。水を飲み、食べ物を食べ、空気を吸う。それらはすべて自然が与えてくれたものです。でも、もし私たちが自然を壊してしまっ

ころに一緒に過ごした犬、バステイのことです。私はパピーウォーカーとしてバステイを盲導犬にするために家族と一緒に一匹の大型犬を育てました。まだ子犬だったころから私たちの家に来て、毎日のように一緒に遊んだり散歩をしたりしました。大きくなって力も強くなったバステイはとても優しく、私にとって大切な家族の一員でした。

特に心に残っているのは、一緒に散歩したことです。リードを持つと、私の歩く速さに合わせてくれて、まるで私を気づかってくれているようでした。私が転びそうになると立ち止まって振り返り、心配そうに見ていた姿を今でも覚えています。言葉は通じなくても、確かに心が繋がっているように思えました。今振り返ると、その瞬間は「命と命が寄り添っていた」大切な瞬間だったのだと思います。

やがてバステイは、盲導犬になるために試験を受けることになりました。私たちの家を離れるときはとてもさびしくて涙が出たのを覚えています。「立派な盲導犬になってね」と願いながら見送りました。しかし、全ての犬が盲導犬になれるわけではありません。バステイも盲導犬にはならず、キャリアチェンジをして、新しい家庭に迎え入れられることになりました。最初は少し残念に感じましたが、「バステイにはバステイの生き方ができたんだ」と考える

たらこの循環は止まってしまうかもしれません。そう考えると、自然を守ることは自分たちの命を守ることもあるのだと気づきました。

あの日の山で見た景色は、今も心に残っています。赤や黄色の葉、倒れた木から生まれる新しい命、澄んだ空気の冷たさ。それらが私に教えてくれたのは、「命はつながっている」ということ。そしてそのつながりは、私たちが守っていくなければ消えてしまうことです。

これからも、私は自然の中で過ごす時間を大切にしようと思います。木々や川、空に目を向け、その中にある命の声を聞きながら、自分の命も精一杯輝かせていきたいです。

## いのちの輝き方

大津市立志賀中学校 三年六組 永井 日向

「命」という言葉を聞いて、私が思い出すのは、小さい

ようになりました。命にはそれぞれの道があり、どんな形でも大切なものだと思います。

新しい家では、バステイは愛犬として幸せに暮らしていたそうです。盲導犬の訓練を受けていたので落ち着いていて、人を安心させる力を持っていたと聞きました。さらに、盲導犬のときにはできなかったこともたくさんできたそうです。ソファで昼寝をしたり、おやつをもらったり、甘えて暮らしていたのです。その話を聞いたとき、私はとても嬉しくなりました。盲導犬にはなれなかったけれど、家庭犬として人に寄り添い、愛される存在になっていたのです。命の輝き方はひとつでなく、いろいろな形があるのだと、そのとき強く感じました。

亡くなる少し前に、私はバステイに会いに行くことができました。久しぶりの再会に、バステイは子犬のころと同じように元気いっぱいにはしゃいでくれました。私は、「まだ元気でいてくれる」と思いましたが、後日飼い主さんから「その日を境に食欲が落ちていった」と聞きました。まるで最後に私に会うために力を出してくれたようで、胸がいっぱいになりました。その後、亡くなったと知らせを受けたときは本当に悲しかったけれど、同時に「最後に会えた」ということが心の支えになりました。

バスティの一生を思い返すと、命には限りがあるけれど、それぞれが確かに輝いているのだと思います。盲導犬にはなれなかったけれど、家庭犬として愛され、たくさんの人を幸せにしたのだと思います。バスティが生きた時間は私や多くの人にとってかけがえのない宝物です。私はこの経験から、一つ一つの命の重さを知り、命を大切にすることの大切さを学びました。私はこれから、バスティのように人の心をあたため、誰かの支えになれる生き方をしたいです。

## ともに育つ、とこころごと

私立普台学院中学校 三年一組 申 吏世

私は中学三年生です。今回は、私が小学校のときに感じたことをテーマにしました。少し前のことではありませんが、私の中では今でも考え続けている大切な気づきだからです。

もが発達障害と診断されると、親や医師だけでなく、学校や習い事の先生、友達までもが定期的に集まり、子どもの成長の様子や今後の方針を一緒に考えていくのだそうです。子どものことを一人で抱え込まず、みんなと一緒に支えていくという姿勢に、私はあたたかさを感じました。支援の方法は国によって異なりますが、日本にも学べる点は多いと思います。親や担任の先生に任せきりにせず、「周囲の人たちも共に考え支えていく」という考え方を広げていくことが大切だと考えました。

とはいえ、その関わり方には、「ちょうど良い距離」が大切です。支えたい気持ちがあっても「そっとしてほしい」と思う人もいるし、近づき過ぎることかえってお互い苦しくなってしまうこともあります。

だから、「こうすべき」と決めつけるのではなく、その人の気持ちに耳を傾けようとする姿勢が大切です。全てを理解することはできなくても、一緒に考えることはできるのです。

また、最近は、「障害は個性だ」と語る人が出てきましたが、それだけでは片づけられない苦しみを抱えている人もいます。ハンドドライヤーの音が怖くて公共のトイレに入れない人、数十秒ごとに大きな声が出てしまい、ど

す。

私が通っていた小学校には、「普通学級」と「特別支援学級」がありました。支援学級の子たちは時々、普通学級で授業を受けたり、給食を食べたりして、私は自然とその子たちと仲良くなりました。中でも、特に仲の良かった子がいました。

ある日、その子のお母さんに「うちの子と仲良くしてくれてありがとう」と言われ、少し驚いたことを覚えています。私は仲良くしてあげていたというつもりはなく、むしろ、一緒にいる中で私の方がその子の優しさに助けられることもあったからです。

そんな一方で、「なんで障害の子と遊んでいるの？」と言ってくる友達や「えらいね」と私を褒める大人たちがいきました。当時の私にとってその言葉は不思議でしかなく、言われる度にもややもやしたことを覚えています。

中学生になり、ある心理士の方からアメリカの支援教育についてお話を聞く機会がありました。アメリカでは子どもへ行っても変人扱いされる人、体の感覚がうまく処理できず、歩いているだけでつまづいたり転んでしまう人。これをただ「個性」として片づけてしまうのは、彼らの生きづらさを十分に理解できていないと感じます。そして、この生きづらさの原因は、必ずしも本人にあるのではなく、「社会の仕組み」が生み出しているかもしれません。

そうした痛みにちゃんと目を向けること。そして「寄り添いたい」と思ったときに踏み出す一歩は、そんなに大げさなことではありません。誰にでも出せる小さな勇気です。そして最後に、「支える側」「支えられる側」とわざわざ分ける必要もないのではないのでしょうか。お互いに学び合い、支え合う関係が広まっていくと、誰もが生きやすい社会になるはずです。

命に優劣はなく、全ての命が平等で大切です。障害の有無に限らず、一人ひとりが安心して暮らせる社会を目指すことは、誰か一人のためだけでなく、私たちみんなにとって意味のあることだと思います。

「共に育ち、共に生きる。」  
その一歩を大切に、今日も生きていこうと思います。

## ●小学生一年生

ヤモリがおしえてくれたいのち

私立小林聖心女子学院小学校 一年 南淳 侑奈

あたらしいいえ

姫路市立安室東小学校 一年 森山 楷生

おにいちゃんのしよくもつアレルギー

姫路市立峰相小学校 一年 片岡 詩玖

## ●小学生二年生

いのちのぎせい

岸和田市立八木小学校 二年 堀田 睦仁

おじいちゃんのはつぼん

和歌山市立四箇郷小学校 二年 喜多 美晴

## ●小学生三年生

ぼくのぼ金を守る命

枚方市立樟葉小学校 三年 安達 洸晴

いのちの居場所

野洲市立野洲小学校 三年 上田 麻祐子

## ●小学生四年生

カマキリのたまご

橿原市立真菅北小学校 四年 村上 翔音

かみの毛とともに思いをのせて

神戸市立塩屋北小学校 四年 中川 紗愛

セミとぼく

神戸市立摩耶小学校 四年 白敷 結人

小さないのち

たつの市立小宅小学校 四年 永井 陽莉

生きているってすばらしい

長浜市立木之本小学校 四年 山岡 夏実

ダウンジャケット

姫路市立安室小学校 四年 糴川 愛理

## ●小学生五年生

東じんぼうから見つめる命

加古川市立氷丘南小学校 五年 井原 彪

命のバトン

堺市立津久野小学校 五年 前田 瀬良

森を作るヒグマの命

私立仁川学院小学校 五年 阿部 心春

ひいおじいちゃんの梅ぼし

私立智辯学園和歌山小学校 五年 鳥 翔太郎

## ●小学生六年生

はかない命

京都教育大学附属京都小中学校 六年 川邊 るみ彩

みんなちがってみんないい

京都市立西野小学校 六年 久後 陽咲

当たり前前じゃない日々を

堺市立白鷺小学校 六年 前川 朱莉

いのちは一人ひとりにしかない物語

堺市立錦小学校 六年 杜 星瑠

●中学生一年生  
命を教えてくれた猫

大阪市立大和川中学校 一年 川端 萌音

ぼくが見たヒロシマ

姫路市立大塩小学校 六年 濱面 明之進

新しい命

大阪市立大和川中学校 一年 法橋 貴心

小さな命

姫路市立香呂小学校 六年 板東 里歩

命ってなんだろう

大津市立仰木中学校 一年 伊藤 翔希

私の家族

姫路市立船津小学校 六年 増田 梨花

祖父の部屋

京都市立下鴨中学校 一年 吉武 紡

明日がない

姫路市立峰相小学校 六年 北村 穂花

尊い命

京都市立二条中学校 一年 飯吞 心音

あたり前じゃない毎日

和歌山市立小倉小学校 六年 大浦 陸聖

生きているということ

神戸市立有馬中学校 一年 新宅 美月

命の大切さを知った

私立四天王寺中学校 一年 田中 景伶

●中学生二年生  
身近な平和

大阪市立大和川中学校 二年 白川 珠裡

命を見つめて

私立四天王寺中学校 一年 永崎 知沙

セミのいのち

大津市立仰木中学校 二年 福永 晴琉

小さな小さな言葉が

私立滝川第二中学校 一年 塩澤 夏希

あなたにとってのいのち

京都市立大宅中学校 二年 宮原 瑛心

生きるということ

天理市立西中学校 一年 中村 刹那

命の声が聞こえる？

京都市立開晴小中学校 二年 上松 正道

AIと『いのち』

天理市立西中学校 一年 久世 華斗

思い出のつながり

京都市立開晴小中学校 二年 橋詰 仁心

当たり前でない命

兵庫県立大学附属中学校 一年 前田 柚希

君がくれた大切なもの

京都市立上京中学校 二年 樋口 和香

赤ちゃんに戻る

守山市立守山北中学校 一年 東出 希来

十八年目のありがとう

京都市立西京高等学校附属中学校 二年 加藤 衣咲

病気とたたかうピアニスト

私立大阪信愛学院中学校 二年 檜垣 咲良

命の重さを感じて

山添村立山添中学校 二年 栗林 瑠采

命の音

私立京都共栄学園中学校 二年 伊東 咲紀

おばあちゃんの狼

八幡市立男山東中学校 二年 加藤 由羅

弟の誕生と命

私立神戸学院大学附属中学校 二年 福田 翔斗

昆虫を通じて感じた命

和歌山大学教育学部附属中学校 二年 出嶋 英輝

おじいちゃんに教えてもらった事

高島市立安曇川中学校 二年 門地 陽和

命の教え

中学生三年生  
大津市立仰木中学校 三年 池野 椋音

命について

彦根市立中央中学校 二年 谷沢 隼

あなたの明るい未来

門真市立門真はすはな中学校 三年 松本 優璃

祖母の日記

守山市立守山北中学校 二年 井村 雫音

おじいちゃんのオムライス

京都市立下鴨中学校 三年 村上 芽衣

いのちについて考える

兵庫県立大学附属中学校 三年 白井 志歩里

おとうと

神戸市立上野中学校 三年 榎本 風里

逆境を力に変えて

和歌山大学教育学部附属中学校 三年 大保 祐翔

おばあちゃんといのち

滋賀県立水口東中学校 三年 西口 真央

いのちを受けいれたとき

私立四天王寺中学校 三年 岩城 千夏

ちいさないのち

彦根市立中央中学校 三年 中寫 海斗

小さくていい

兵庫県立芦屋国際中等教育学校 三年 金 待希

愛の力はいのちを救う

兵庫県立芦屋国際中等教育学校 三年 林 愛生アローラ



## 選考を終えて

今回から選考委員に加わってくださった藤岡陽子さんが、ある作品について評した一言を、ぜひ、この場でご紹介させていただきます。

「切実さを感じました！」

ああ、これだったんだなあ、なるほど。僕はココロの中で大きく膝を打ちました。いままでうまく説明できなかったことを、藤岡さんにごみに表現していただいたのです。

このコンクールは、もちろん「作文」を書いてもらうわけですから、選考では文章や構成の完成度を問うことは必要です。でも、それだけじゃない、それだけで終わってしまうと、「いのち」をテーマにする意味がなくなってしまう……。

数年にわたって選考に携わってこられた菊池省二さんも、そして僕も、その点については考えが一致していました。だからこそ、いままでの回でも「作文としてはあまりじょうずじゃないけど、すごく大事なことを書いてくれる」と感じた作品に、より高い評価をしてきたつもりです。

今回、藤岡さんの一言で、あらためて手応えを得ました。いままでの回でも、もちろん今回も、選考委員会の面々が胸打たれた作品は、すべて「切実さ」があった——言い換えれば、「一所懸命」だったのです。

それはそうですよね。生きものはみんな、一所懸命に生きている。「いのち」をつなぐために、自分に与えられた「いのち」をまっとうするために、ちっちゃくても（だからこそ）、弱くても（だからこそ）、せいっぱい、一所懸命に生きています。じゃあ、そんな「いのち」を描く作文が切実にならないはずがないでしょう……。

この文集にも、子どもたちの切実さ——一所懸命さが、あふれています。切実さから目をそらさず、一所懸命に書いたからこそ、本名などを非公表にする選択をした作品もありますが、どうか、ご理解ください。

文集に載った皆さんだけでなく、応募してくれたすべての皆さん、それぞれの「一所懸命」をありがとうございました。

そして、今年も、ぜひ、新たな「一所懸命」を！

選考委員 菊池 省三

選考委員 重松 清

選考委員 藤岡 陽子

表紙・カットイラスト 永田 萌

2025年度 小・中学生

## 「いのち」の作文コンクール作品集

---

2026(令和8)年1月発行

編集・発行 公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団  
〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号